

## 《参考資料》

### スペシャルオリンピックス（SO）とは

知的障害のある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じ提供している国際的なスポーツ組織です。SOでは、これらのスポーツ活動に参加する知的障害のある人たちをアスリートと呼んでいます。

1962年に故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバー夫人が、自宅の庭を開放して開いたデイ・キャンプがスペシャルオリンピックス（SO）の始まりです。知的障害があるために、まだ一度もプールで泳いだり、トラックを走ったり、バスケットボールをしたことがない人たちにスポーツを提供する、それが彼女の願いでした。実は彼女の姉ローズマリーには、知的障害がありました。

1968年にジョセフ・P・ケネディ Jr.財団の支援により組織化され、「スペシャルオリンピックス」となり、全米から世界へと広がっています。また1988年に、国際オリンピック委員会（IOC）と「オリンピック」の名称使用や相互の活動を認め合う議定書を交わしています。本部はアメリカ、ワシントンD.C.にあり、170カ国以上で、約420万人のアスリートと100万人以上のボランティアが活動に参加しています。現在、SO国際本部（SOI）の会長は、創設者ユニスの子息であるティモシー・シュライバーが務めています。

スペシャルオリンピックスが提供する継続的なスポーツ活動は、アスリートたちの健康や体力増進、スキルの向上を促進するだけでなく、多くの人々との交流は彼らの社会性を育んでいきます。また、適切な指導と励ましがあれば、アスリートたちは少しずつでも確実に上達し、自立への意識を高め成長していきます。参加するボランティアたちもアスリートから多くのことを学びます。

オリンピックが大会名を指すのに対して、「スペシャルオリンピックス」は大会名のみではありません。スペシャルオリンピックスではなく「スペシャルオリンピックス」と複数形で表されているのは、この名称が大会名のみではなく、年間を通して様々なスポーツトレーニング・プログラムと競技の機会が、各地で継続的におこなわれていることを意味します。

スペシャルオリンピックスは非営利活動ですから、運営はすべてボランティアと善意の寄付によっておこなわれています。アスリート、ファミリー、そしてボランティアが一緒になって参加し、活動を支えています。

## 日本では

1980年に「日本スペシャルオリンピックス委員会（JSOC）」が設立され活動を行っていましたが、1992年に解散しました。そうした中、1991年夏の世界大会に熊本から参加した10才のアスリートと彼女を育てたボランティアコーチが、体操競技で銀メダルを獲得しました。ダウン症と難聴のあるアスリートの挑戦する姿は多くの人々の感動を呼び、熊本の地でボランティアの輪が広がり、1993年3月「スペシャルオリンピックス熊本」が発足、翌1994年11月に国内の本部組織である「スペシャルオリンピックス日本（SON）」が設立されました。

現在は47都道府県全てに活動が広がり、全ての47都道府県に地区組織が設立され、全国で7,485人のアスリートと13,637人以上のボランティアが参加しています。スペシャルオリンピックス日本は2001年5月22日、特定非営利活動法人（NPO法人）として内閣府より認証を受け、2006年には国税庁より認定NPO法人の認証を受けました。更に、2012年3月13日に内閣府より、公益財団法人の認定を受け、2012年4月より正式に「公益財団法人スペシャルオリンピックス日本」としての活動をしています。

任意団体スペシャルオリンピックス日本・青森は、2004年11月20日に設立されました。公益財団法人スペシャルオリンピックス日本が認定した、青森県内で活動をする唯一の地区組織として、青森・弘前・八戸の3つのランチ（支部）において活動をしています。

## 日常的なスポーツトレーニング・プログラム

スペシャルオリンピックスの最も大切な活動は、各地で行われる日常的なスポーツトレーニング・プログラムです。アスリートの住む地域の施設を会場に、同じ地域に住むボランティアが運営、コーチなどを務め、アスリートたちとスポーツを楽しむことがプログラムの基本方針です。このプログラムで、アスリートはチャレンジする勇気を身につけ達成する喜びを知ります。さらに、ボランティアと親しみ仲良くなることで彼らの世界は広がり、地域社会にふれあう機会を得ます。一方で、ボランティアもアスリートたちと接することにより、知的障害に対する理解を深めながら人として大切な多くのことを学び、地域社会もアスリートたちを普通に当たり前に受け入れていくこととなります。

今、この瞬間も世界のどこかでアスリートたちがプログラムに参加し、多くのボランティアがそれぞれのプログラムを支えています。

現在日本では、夏季16競技（水泳競技、陸上競技、バドミントン、バスケットボール、ボッチャ、ボウリング、馬術、サッカー、ゴルフ、体操競技、ソフトボール、卓球、テニス、バレーボール、自転車競技、フライングディスク）、冬季7競技（アルペンスキー、クロスカントリースキー、スノーボード、スノーシューイング、ショートトラックスピードスケート、フィギュアスケート、フロアホッケー）のスポーツトレーニング・プログラムが提供されています。

青森県では、夏季3競技（水泳競技、陸上競技、バスケットボール）、冬季2競技（アルペンスキー、ショートトラックスピードスケート）のスポーツトレーニング・プログラムが提供されています。

各プログラムは、専門コーチばかりでなく、一般の市民ボランティアの参加を積極的に呼びかけています。またアスリートと知的障害のない人（パートナー）がチームやペアを組んで競技する「ユニファイドスポーツ®」にも取り組んでいます。

## 競技会は地区から世界まで

スペシャルオリンピックスの競技会は地区大会（県大会）、ナショナルゲーム（全国大会）、世界大会等があります。国内では、1995年熊本で初の夏季ナショナルゲームが開催され、翌1996年には宮城と福岡で初の冬季ナショナルゲームが開催されました。近年では、2016年に新潟で第6回冬季ナショナルゲームが開催され、943人の選手団、延べ4,100人のボランティアが参加しました。世界大会は、日頃のトレーニングの成果の発表としてだけでなく、異文化社会の体験と交流の場として、1968年の第1回夏季大会を皮切りに、夏季冬季とも4年毎に開催されています。スペシャルオリンピックス日本は1995年7月に開催された、第9回夏季世界大会アメリカ・コネチカット州大会以来、毎回日本選手団を派遣しています。また、2005年2月には、アジアで初めてのSO冬季世界大会が長野で開催され、約2500人の選手団、約11,000人のボランティアが参加しました。

## ディビジョニング

スペシャルオリンピックスでは、アスリートの可能性が最大限に発揮できるよう、競技会でディビジョニングをおこないます。ディビジョニングとは、年齢、性別、競技能力の到達度などに応じてクラス分けすることですが、ほぼ同じ競技能力レベルで競い合うことにより、アスリートにとって最も効果的な競技環境を提供することができ、アスリート個々人の成長を刺激することができると思っています。競技能力は、15%程度の範囲内で分けられます。また、スペシャルオリンピックスの競技会で予選落ちはありません。予選はディビジョニングであり、競技会に出場したアスリートは全員が決勝に進み、全員が表彰台に立ち表彰を受けます。全てのアスリートに勝利のチャンスが与えられます。

## スペシャルオリンピックスの競技会精神

スペシャルオリンピックスの競技会精神は、以下の言葉に集約されています。

『スペシャルオリンピックスで大切なものは、最も強い体や目を見張らせるような気力ではない。それは各個人のあらゆるハンディに負けない精神である。この精神なくしては勝利のメダルは意味を失う。しかしその気持ちがあれば決して敗北はない。』

創設者 ユニス・ケネディ・シュライバー

## トレーニング・フォー・ライフ

スペシャルオリンピックスでは、スポーツをすること自体がアスリートたちの最終目標であるとは考えていません。スポーツは、彼らの可能性を伸ばすために適した最良の方法の一つだと考えています。スペシャルオリンピックスの最大の目標は、アスリートたちのさまざまな能力を高めること、彼らに自信と勇気を持ってもらうこと、そして彼らの心と体を成長させることにあります。トレーニングや競技の現場で身につけたことが、アスリートの人生において彼ら個人の向上や自立、社会参加につながることを目指し、そのための機会を途切れることなく提供していきたいと考えています。彼らがあらゆる意味で成長し、責任を持って仕事をこなし、リーダーになれることを示したいと願っています。

## いつまでも社会と関わりながら

いつまでも社会と関わりながら、アスリートが何歳になってもスポーツを通して、「生きがい」のある人生を過ごせる環境を目指しています。

青森県は全国で最も平均寿命の短い地域のため、アスリートのファミリーがガンなどで若くして亡くなり、残されたアスリートが経済的に困窮する事態が毎年おきています。経済的に困窮した場合、水泳プール入場料やスケートリンク入場料、スキー場リフト券などの費用捻出が難しくなり、スポーツトレーニング・プログラムへ参加が難しくなります。

プログラムは、特に特殊支援学校（養護学校）を卒業した18歳以上のアスリートにとって、趣味のサークル・社会人サークルのように「生きがい」を持てる場であると同時に、自宅、就労先に次ぐ、心が休まる場所「第3の居場所」（サード・プレイス）です。また、プログラムは市民ボランティアとスポーツを通して、一体感や心を通わせることができる場所であり、インクルーシブ共生社会への扉でもあります。

スペシャルオリンピックス日本・青森では、街頭募金や店頭募金箱の設置、クラウドファンディング等を行い、集まった資金で水泳プール入場料等を無料化し、親を亡くした場合でも、アスリートが継続して参加できるようにしています。

## ナショナルゲーム（全国大会）一覧表

1995年3月25日～26日 第1回夏季ナショナルゲーム熊本大会（熊本市）  
アスリート 137名 コーチ他 64名

1996年2月23～26日 第1回冬季ナショナルゲーム宮城大会（宮城県蔵王町）  
アスリート 34名 コーチ他 17名

1996年6月8～9日 第1回冬季ナショナルゲーム福岡大会（福岡市）  
アスリート 45名 コーチ他 21名

1998年8月28～30日 第2回夏季ナショナルゲーム神奈川大会（神奈川県平塚市）  
水泳競技、陸上競技、バスケットボール、ボウリング、サッカー、体操競技、卓球、バレーボール  
アスリート 194名 コーチ他 134名  
香港選手団（アスリート 6名 コーチ他 4名）

2000年2月25～27日 第2回冬季ナショナルゲーム長野大会（長野県長野市、牟礼村）  
アスリート 121名 コーチ他 81名  
台湾選手団（アスリート 7名 コーチ他 4名）  
韓国選手団（アスリート 6名 コーチ他 4名）

2002年8月15～18日 第3回夏季ナショナルゲーム・東京（東京都内）  
代々木会場：国立オリンピック記念青少年総合センター、織田フィールド、シチズンボウル  
調布会場：NTT研修センター、東京スタジアム、調布市総合体育館  
水泳競技、陸上競技、バドミントン、バスケットボール、ボウリング、サッカー、体操競技、卓球、テニス、バレーボール、フライングディスク  
アスリート 816名 コーチ他 546人  
海外選手団（中国、台湾、マカオ、香港、タイ）アスリート 82人 コーチ他 29人  
招待参加アスリート 98人

2004年2月27～29日  
第3回冬季ナショナルゲーム・長野/2005年SO冬季世界大会・プレ大会  
長野市：ビッグハット、ホワイトリング（長野県長野市、山ノ内町、白馬村、牟礼村）山ノ内町：一之瀬ファミリースキー場  
白馬村：スノーハープ 牟礼村：いづなリゾートスキー場  
アルペンスキー、クロスカントリースキー、スノーボード、スノーシューイング、ショートトラックスピードスケート、フィギュアスケート、フロアホッケー  
アスリート 620名、ユニファイドパートナー24名、コーチ他 393人  
海外選手団（中国、香港、マカオ、シンガポール、韓国、ロシア、チェコ、ポーランド、ニュージーランド、スロベニア、オーストリア）  
招待参加アスリート 87人

2006年11月3～5日

第4回夏季ナショナルゲーム・熊本（熊本県内）

熊本市、阿蘇市、南阿蘇村の9会場

陸上競技、水泳競技、バドミントン、バスケットボール、ボウリング、サッカー、ゴルフ、  
体操競技、卓球、テニス、バレーボール、フライングディスク

アスリート 1016名、コーチ他 560名  
海外選手団（中国、中華台北）

2008年3月7～9日 第4回冬季ナショナルゲーム・山形（山形県山形市）

蔵王温泉スキー場、蔵王温泉スキー場総合グラウンド、ウェルサンピア山形、山形市総合ス  
ポーツセンター

アルペンスキー、クロスカントリースキー、スノーボード、スノーシューイング、ショ  
ートトラックスピードスケート、フィギュアスケート、フロアホッケー

アスリート 566名、コーチ他 330名、参加地区 32地区

2010年11月5～7日 第5回夏季ナショナルゲーム・大阪（大阪府内）

大阪市、吹田市、門真市、茨木市、堺市の10会場

陸上競技、水泳競技、バドミントン、バスケットボール、ボウリング、サッカー、ゴルフ、  
体操競技、卓球、テニス、バレーボール、フライングディスク

アスリート 1042名、コーチ他 591名、参加地区 46地区

2012年2月10～12日 第5回冬季ナショナルゲーム・福島（福島県内）

郡山市、猪苗代町の3会場

アルペンスキー、クロスカントリースキー、スノーボード、スノーシューイング、ショ  
ートトラックスピードスケート、フィギュアスケート、フロアホッケー

アスリート 574名、コーチ他 320名、参加地区 33地区

2014年11月1日～3日 第6回夏季ナショナルゲーム・福岡（福岡県内）

福岡市、北九州市、宗像市、古賀市、粕屋町の5会場

水泳、陸上競技、バドミントン、バスケットボール、ボウリング、サッカー、ゴルフ、体操  
競技、卓球、テニス、バレーボール、フライングディスク、馬術（エキシビション）

アスリート 975名、コーチ他 593名、参加地区 47地区

2016年2月12～14日 第6回冬季ナショナルゲーム・新潟（新潟県内）

新潟市、南魚沼市の2会場

アルペンスキー、スノーボード、クロスカントリースキー、スノーシューイング、フィ  
ギュアスケート、ショートトラックスピードスケート、フロアホッケー

アスリート 614名、コーチ他 329名、参加地区 31地区

2018年 第7回夏季ナショナルゲーム・愛知（予定）

## 世界大会一覧表

1968年 第1回夏季大会	アメリカ／シカゴ	
1970年 第2回夏季大会	アメリカ／シカゴ	
1972年 第3回夏季大会	アメリカ／ロサンゼルス	
1975年 第4回夏季大会	アメリカ／ミシガン州	
1977年 第1回冬季大会	アメリカ／コロラド州	
1979年 第5回夏季大会	アメリカ／ニューヨーク州	
1981年 第2回冬季大会	アメリカ／バーモント州	
1983年 第6回夏季大会	アメリカ／ルイジアナ州	
1985年 第3回冬季大会	アメリカ／ユタ州	
1987年 第7回夏季大会	アメリカ／インディアナ州	
1989年 第4回冬季大会	アメリカ／ネバダ州、カリフォルニア州	
1991年 第8回夏季大会	アメリカ／ミネソタ州	
1993年 第5回冬季大会	オーストリア／ザルツブルグ	
1995年 第9回夏季大会	アメリカ／コネチカット州	
		143 カ国が参加 日本選手団 30 名
1997年 第6回冬季大会	カナダ／トロント	
		70 カ国が参加 日本選手団 17 名
1999年 第10回夏季大会	アメリカ／ノースカロライナ州	
		150 カ国が参加 日本選手団 45 名
2001年 第7回冬季大会	アメリカ／アラスカ州	
		約 70 カ国が参加 日本選手団 16 名
2003年 第11回夏季大会	アイルランド／ダブリン	
		約 160 の国と地域が参加 日本選手団 77 名
2005年 第8回冬季大会	日本／長野県	
		約 84 の国と地域が参加 日本選手団 150 名
2007年 第12回夏季大会	中国／上海	
		164 の国と地域が参加 日本選手団 120 名
2009年 第9回冬季大会	アメリカ／アイダホ州	
		95 の国と地域が参加 日本選手団 87 名
2011年 第13回夏季大会	ギリシャ共和国／アテネ	
		170 の国と地域が参加 日本選手団 75 名

2013年 第10回冬季大会 韓国江原道／平昌（ピョンチャン）

111の国と地域 日本選手団 84人

2015年 第14回夏季大会 アメリカ／ロサンゼルス

164の国と地域 日本選手団118人

2017年 第11回冬季大会 オーストラリア （予定）



\* 問い合わせ先 \*

公益財団法人スペシャルオリンピックス日本  
〒105-0003 東京都港区西新橋 2-22-1 西新橋 2 丁目森ビル 7 階  
TEL : 03-6809-2034 FAX : 03-3436-3666  
E-mail : tokyo\_office@son.or.jp  
<http://son.or.jp>

任意団体スペシャルオリンピックス日本・青森  
〒030-0943 青森市幸畑2-3-1 青森大学・宮川愛子研究室  
TEL : 080-1833-5509 FAX : 017-738-0143  
E-mail : son\_aomori@son.or.jp  
<http://son-aomori.org>